「女性と人権」講座

【講演とパネルディスカッション】 無業の若年女性の現実と自立支援

日　時:2016 年 6 月 5 日(日)
会　場:エル・パーク仙台セミナーホール
参加者数:29 名

社会の中に埋もれがちな、様々な困難を抱える女性たちの現状に目を向ける「女性と人権」講座の3回目。定職を持てない若い女性たちの困難、深刻な状況に焦点を当て、その支援のカタチを考えた。

.＜講　演＞

「ガールズ“ゆる～り仕事準備講座”を通して見える無業若年女性の現実と自立支援」

エル・ソーラ仙台 管理事業課長　渡邊ひろみさん

エル・ソーラ仙台では、若年（15 歳～39 歳）の無職のシングル女性を対象に、「ガールズ“ゆる～り仕事準備講座」を 2010 年から開催している。働きづらさや人間関係づくりに困難を抱える女性たちが自己肯定感を高め、社会に出るための自信を取り戻すことができるよう、継続的な事業に取り組んでいる。

参加者の 2 割は就労経験がなく、非正規雇用が圧倒的に多く、正規雇用でもいったん仕事を辞めると再就職する場合は徐々に条件が悪くなり、非正規就労になるケースが多い。多くは、家族の扶養になっており、今無理して働かなくても良いが、将来が不安という人が占める。

ガールズたちは、学校でのいじめや職場でのパワハラ・セクハラを経験。鬱などの病気を発症していることが多く、それも離職の原因になっている。両親の DV、母親の過干渉、母と娘の関係なども影響し、「普通であって当たり前」というプレッシャーが彼女たちを苦しめている。また、自己肯定感が低いことも共通しており、人間関係がつくれない、みんなより劣っている、友人も少ない、みんなと一緒に働けないなどから自己肯定感が低く、自分を責める傾向がある。

【支援プログラムの内容】

ガールズたちが一歩踏み出すきっかけを作るために実施しているこの講座は 8 日間 2 週間にわたって行われており、自己肯定感を高めることと自立に向けて生活リズムを整えることを目標にしている。

＜1 日目＞人との距離感の取り方について、自己紹介に時間をかける。
＜2 日目＞自立のための気持ちの整理。自分で考えて決める。
＜3 日目＞呼吸法、人との対処法を伝えることで安心感につながる。
＜4 日目＞メイクアップ。メイクで顔が明るくなりプラスの感情が得られる。
＜5 日目＞自分のために朝食をつくる。
＜6 日目＞自分自身を大切にすること学ぶ。
＜7 日目＞自分の体を大切にする。

終了後は、職場体験実習の受け入れ団体を複数紹介し、自分で選んで体験してもらう。一人ひとりに合わせた伴走型の支援により、困難によってそがれた力を、声を上げる力を取り戻してもらう。

★★★　★★★

後半は、当事者も交え、仙台市生活自立・仕事相談センター「わんすてっぷ」の後藤美枝さん、渡邊課長とともに、パネルディスカッションを行った。

個人的な問題は社会的問題である。課題の見える化を図っていくことの必要性。周囲にいる困難を抱えた人に対して感受性を高めていくことの重要性等が共有された。

「女性と人権」講座

【講演と対談】 福島からの母子避難とジェンダー

日　時:2016 年 8 月 28 日(日)
会　場:仙台市市民活動サポートセンターセミナーホール
参加者数:21 名

福島での原発事故は、「自主避難」と呼ばれる避難者を数多く生み出した。男性が稼ぎ手、女性がケアという性別役割分業に基づいての選択には、ジェンダー問題が深くかかわっている。

【講演】 原発事故による母子避難をめぐるジェンダー

山根純佳さん（実践女子大学人間社会学部准教授）

原発事故も人災だが、この母子避難の背景にも人間社会が作り出した問題がある。放射能汚染によって生命の再生産への脅威が生じ、国が補償すべき安全性への不安から、親の責任が拡大して親の負担が増大した。

これまで当然得られたケアの基盤を親が選択しなければならない状況を作り出した。親の自己責任感と自責感を、避難するにせよ、避難しないにせよ、親たちが感じざるを得ない状況を作り出した。安全な場所を求めて避難した結果、これまで福島で築いてきたケアのサポート、夫・地域から切り離され、母親が一人で責任を背負わなければならない極限状態に女性を追い込んだのが今回の原発事故だ。

2012 年 6 月～7 月、山形県でアンケート調査を実施した。山形県への避難者は 13,000 人。山形県に避難している母親たちの7割が感じている孤独感の内容をみると、6割が子育てを助けてくれる人がいない。5割が自分の話し相手や相談相手がいないとともに配偶者と会えない等と記述している。アンケートの自由記述で目についたのは「親が病気になれない」「自分が病気になったら、子どもたちはどうなるのか」という記述だ。精神的な支えがほしい、慢性的な疲労感を感じる、自分の健康は後回しになっている、夫や地域から離れて母親一人でケアをしなければならない負担が大きくのしかかっている。様々な負担を抱えながら、福島に戻るのか、山形での生活を続けるのかを天秤にかけている。

母子避難の母親たちが「自責感」を抱えてしまう構造とは何なのか。子どもが避難したいと言ったわけでなく、自分が避難させた子どもが「お父さんに会いたい」というような一つ一つの場面で、果たして避難の選択が正しかったのだろうか、私が選択して良かったのだろうかという自責感を感じている。避難するかしないかは自由だ。

借り上げ住宅はあるという制度的条件の中で避難するという選択をした。これは政策によって作り出されたもので、自主避難にとどめた国の政策、子ども被災者支援法も形骸している。データとして表れない母子避難への非難、「母親のヒステリー」という言い方がよく出てくる。母子避難をとらえた時に、母親に向けられたまなざしという問題を考えていかなければならない。

女性はヒステリックだという社会のまなざしに対して、母親が感情的、情緒的だという見方があるが、私の聞き取り調査では、決してそうではない。夫を説得して避難してきている。子どもがプールに入れるか、除染しているか、プールサイドの放射線量まで心配している。家の中の放射線は 0.5 マイクロシーベルト、放射線管理区域より高い。これは2歳の子どもがいられる環境ではない。など確認して避難してきている。こうしてデータを集めて避難を選択しても、ヒステリックな振る舞いとみられる傾向がある。ジェンダーの問題は根深い。女性たちがどう考え、どう行動しているかをきちんと評価しなければならない。家族と意見が違っても、それを主張して説得する。すごいパワーがいることであって、自己決定して自己判断している。そういう側面を評価されない現実がある。人災として作り出された母子避難の問題、母親に過剰な責任が課せられている状況をどう考えていくのか。家族に押し込められているものを少しずつ社会に分散させて母親が頑張らなくてもどんな子どもたちも生存権が確保されるように、国として世界として取り組むべきだ。

「女性のための防災力 UP 講座」開催

女性防災ネットは、各地域を拠点に様々な活動を展開していますが、さらに地域での人材の広がりをすすめていこうと「女性のための防災力 UP 講座」を実施しました。今年度は、青葉区と宮城野区において、それぞれの女性防災ネットが主体となって開催。今回の講座の特徴は、地元で防災活動に取り組む様々な組織と連携することを目的に、防災に取り組む NPO やグループを知る講座を盛り込みました。

【女性のための防災力 UP 講座 in 青葉】　主催:女性防災ネット青葉

会場:エル・パーク仙台　　参加者:15 名

日時	内容	講師
9 月 6 日(火)	①地域の防災に女性の力を活かそう！ ②青葉区の防災・ここがポイント！	宗片恵美子(イコールネット仙台) 仙台市危機管理室
9 月 20 日(火)	地域の防災活動を知ろう！ 紙芝居を通して、障害児・者への災害時支援を考えよう！	谷津尚美さん　他 (NPO 法人アフタースクールぱるけ)
10 月 4 日(火)	「災害時、こんな時の対応は・・」避難所づくりワークショップ	女性防災ネット青葉

【女性のための防災力 UP 講座 in 宮城野】　主催:女性防災ネット宮城野

会場:宮城野区中央市民センター　参加者:10 名

10 月 25 日(火)	①地域の防災に女性の力を活かそう！ ②宮城野区の防災・ここがポイント！	宗片恵美子(イコールネット仙台) 仙台市危機管理室
11 月 15 日(火)	地域の防災活動を知ろう！ 子育てママたちの防災活動から「知恵」と「技」を学ぼう！(この回のみ託児あり)	西出あきさん　他 (子育てサークル「ハッピーママ」)
11 月 29 日(火)	「災害時、こんな時の対応は・・」避難所づくりワークショップ	女性防災ネット宮城野

東松島市で開催

女性防災リーダー養成講座

「男女共同参画推進団体サークルコロッケ」と協力

東松島市では、男女共同参画の推進を目的に活動している「サークルコロッケ」が講座開催の協力団体として名乗りを上げてくれたことが講座開催につながりました。加えて、東松島市の市民協働課・防災課が会場の手配や広報について積極的に協力してくれたことが、さらなる力となりました。

講座内容は、すでに各地域で開催している 3 回連続の講座で、参加者は 28 名。東松島市は被災地でもあり、参加者の問題意識も高く、毎回、充実した内容となりました。

講座終了後は、サークルコロッケが呼びかけ、参加者同士の交流会を企画し、独自に活動をすすめていくとのことで、おおいに期待しているところです。

―今年度は、岩沼において 2 期目の養成講座が、大崎では、初の養成講座が開催されました―

主催:いわぬま女性防災リーダーの会　（会場:岩沼市民会館　開催時間:10:00～12:00）

岩沼市の防災計画と避難所運営マニュアル（9.17）/災害時・女性の視点がなぜ必要か？（10.22） 要援護者の支援（11.19）/「こんな時の対応は？…」ワークショップ（12.17）

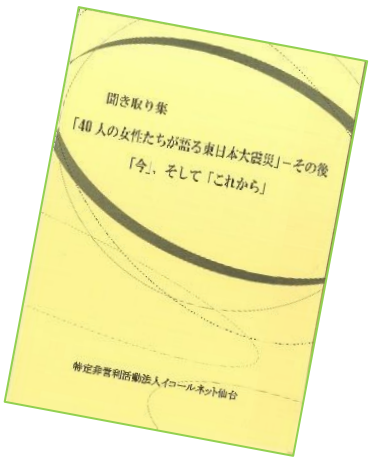
主催:女性と防災・ネットワークのおおさき（会場:大崎市市民活動サポートセンター　開催時間 13:30～15:00）

防災・減災と男女共同参画（10.16）/ジェンダーと防災（10.26）/震災後の心のケアに取り組む（11.19）

……

発行しました！

聞き取り集
「40 人の女性たちが語る東日本大震災」－その後 今、そして「これから」



2013 年、40 人の女性たちの「3.11」を聞き取りさせていただいてから 5 年。女性たちは、この年月をどう過ごしてきたのか。どのような変化があったのか。そして、女性たちにとって、この時間はどういう意味をもったのか。女性たちの「その後」を聞き取りさせていただきました。

協力いただいたのは 20 名。「震災のことは思い出したくない」「震災以来、体調を崩し、入退院を繰り返している」等の理由で、協力いただけなかった方々もおりました。5 年という月日が流れても、震災がもたらす影響は、重く深く存在していることを改めて思い知らされた時間でした。

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2016 参加企画

映画とトーク「飯舘村の母ちゃんたち　土とともに」

日　時:11 月 20（日）　映画:13:30～15:05　　トーク:15:20～16:30
会　場:エル・パーク仙台ギャラリーホール（141ビル 6 階）
参加者数: 127 名
主催　（公財）せんだい男女共同参画財団　　企画実施　特定非営利活動法人イコールネット仙台

原発事故から 5 年―

古居みずえ監督が描く　へこたれない母ちゃんたちの愛しき友情ストーリー

＜映画のあらすじ＞

菅野榮子さんは、79 歳。孫に囲まれた幸せな老後を送るはずが、福島第一原発の事故で一転する。榮子さんが暮らす福島飯舘村は全村避難となり、ひとりで仮設住宅で暮らすことになった。支えは親戚であり友人の 78 歳の菅野芳子さんだ。芳子さんは避難生活で両親を亡くし、ひとりで榮子さんの隣に移ってきた。「ばば漫才」と冗談を飛ばし互いを元気づける 2 人の仮設暮らしが始まった･･･

＜トーク＞　菅野 榮子さん×菅野 芳子さん×古居みずえ監督

飯舘村は 70%が山林で占められている。原発事故と同時に、村全体が「ホットスポット」という聞き慣れない危険地域に指定され、住民は計画避難を強いられた。結果、家族は分断され、地域コミュニティも崩壊した。やむなく移った仮設住宅の生活も当初 2 年の約束が、すでに 5 年が経とうとしている。悩みや苦しみ、葛藤を抱える中で、「笑ってねぇどやってらんねぇ」という言葉が榮子さんの中に生まれていた。原発事故によって人生を狂わされたのは芳子さんも同様だ。避難先で両親を亡くし、息子に「なぜ、行くのか」という問いに「自立して生きたい」と榮子さんの住む伊達市の仮設住宅で暮らすことになる。「一人で生きることは並大抵のことではないが、よっちゃんと二人なら何とかなる」と榮子さん。二人で支え合いながら、飯舘村の食文化を絶やさず伝えていこうと、味噌づくりや凍み餅づくりに精を出す。来年 3 月には帰村宣言が出される。二人は故郷に帰る決意をしている。そのためにも、行政には村の安心・安全な環境を保障してほしいと訴える。二人を 5 年にわたって撮り続けてきた古居監督は、「原発」はテーマだが、そこに生きる人たちを通して問題を表現したかったという。

～参加者からのアンケートには二人への心温まるメッセージが数多く寄せられた～

発　行　特定非営利活動法人イコールネット仙台
発行日　2017 年 1 月
連絡先　TEL・FAX　022-234-3066